

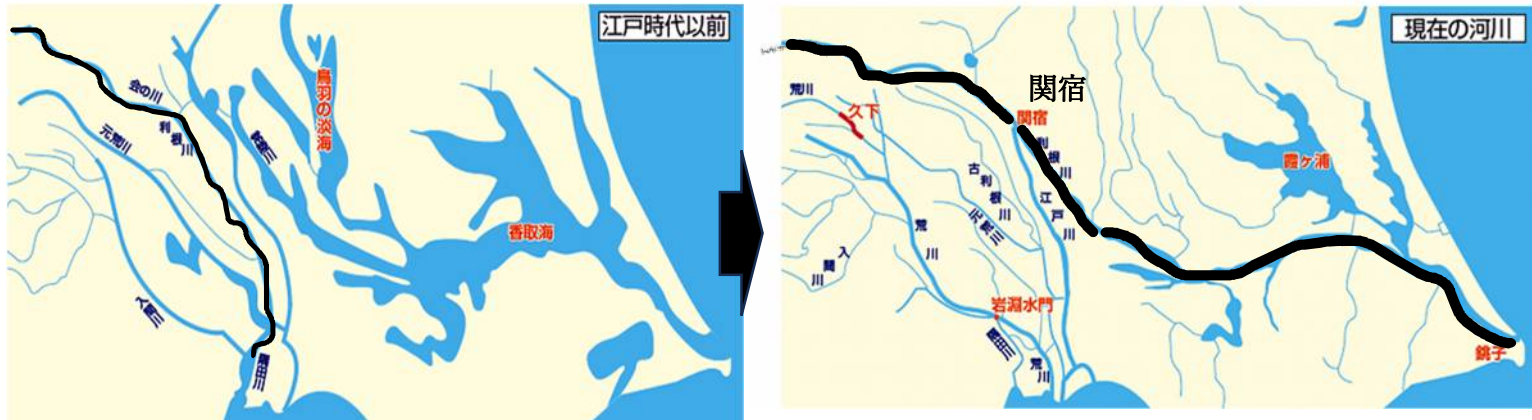
2-3 家康は栄えていた小田原でなく、何故、江戸を本拠地に決めたのか

地理的な三つの要件が考えられる。(参照：刀剣 world やマンション経営大学)

- ①大都市が造れる地形だった・・・不毛な地が広がり、幾つもの大きな河川と海があった。
- ②物流の発展する環境だった・・・当時の交通は船が主体⇒河川と海が大いに役立つ
- ③未開の地(殆ど人が居なかった)・・・開発すれば大勢の人々が暮らせる町に出来た

2-4 家康は入府当時から利根川東遷を計画した(参照：国土交通省関東地方整備局)

天正18年(1590)に江戸に入った徳川家康は、関東郡代に伊奈備前守忠次を任命、利根川東遷事業を行わせました。事業は文禄3年(1594)から60年の歳月をかけて、忠次から忠政、忠治と受け継がれ、承応3年(1654)に完了。これによって、わが国最大の流域面積を誇る河川が誕生した



東遷以前、利根川や渡良瀬川は江戸湾へ

利根川東遷後、渡良瀬川は利根川の支流になる

2-5 利根川東遷がもたらした大きな成果

(参照：利根川上流河川事務所HP)

- ① 洪水対策が完成し湿地帯からやや乾燥した大地の誕生
- ② 豊かな農地を作るための灌漑工事が進み、美田が多くなった
- ③ 江戸へ日本中の物資を集めるための物流機能の整備が出来た
⇒ 利根川を太平洋に出すことで、大きな船が海から入りやすくなった
- ④ 東北の雄「伊達政宗」対策も出来た。

第2部 榊原康政の行った大土木事業〔渡良瀬川と利根川に堤防を築く〕

1) 榊原康政はなぜ、築堤を行ったのか？ 推定 家康の利根川東遷の影響を受けた？

1-1 榊原康政は、徳川家康の四天王(井伊直政・本多忠勝・酒井忠次と)と言われている

1-2 少年期(13歳)より家康に仕え、大きな戦いでの軍功著しい武将

1-3 1590年家康関東入府時、館林藩主となる 伊達氏や佐竹氏への対応

1-4 当時関東総奉行になり、関東地方の領地を家臣に分配する役目を担う。

⇒配下に伊奈忠次が居た。(利根川東遷の責任者) 康政は利根川東遷の意味を理解していた
加賀美推定



1-5 榊原康政は、利根川と渡良瀬川の氾濫状況を入府時から理解していた。(農民の苦勞)

1-6 館林藩は、広い渡良瀬低地と谷田川低地に囲まれた台地にあった。(新田開発可能)

1-7 利根川東遷がしやすくなる《利根川と渡良瀬川の築堤》⇒上流の流路が安定する

2) 康政の利根川・渡良瀬川の築堤事業とは 市誌からの記載

2-1 『榊原氏が城主の時代になると、文禄四年(1595)に榊原康政の命令により、奉行に任じられた荒瀬彦兵衛・石川佐次衛門を中心に、利根川・渡良瀬川の堤防工事が行われ

た。『館林城代々』利根川は古戸村（太田市）から下五箇村（板倉町）まで約 30 km、渡良瀬川は下野国足利郡田中村（足利市）から海老瀬村（板倉町）に至る約 20 kmに渡る堤防が築造されたのである。その結果、館林以東の低湿地帯（渡良瀬低地）でも開発が進んだ』（参照：近世館林の歴史・館林市史歴史編）

2-2『文禄四年（1595）荒瀬彦兵衛・石川佐次右衛門を奉行に工事させ、利根堤防は古戸より下五箇まで延長 18320 間、高さ 1 丈 5 尺ないし 2 丈、敷 15 間、馬踏 3 間ないし 5 間、渡良瀬堤防は下野国足利郡田中村より海老瀬に至る 12093 間、高さ 2 間から 3 間、敷 10 間ないし 18 間、馬踏 2 間の大事業であった。

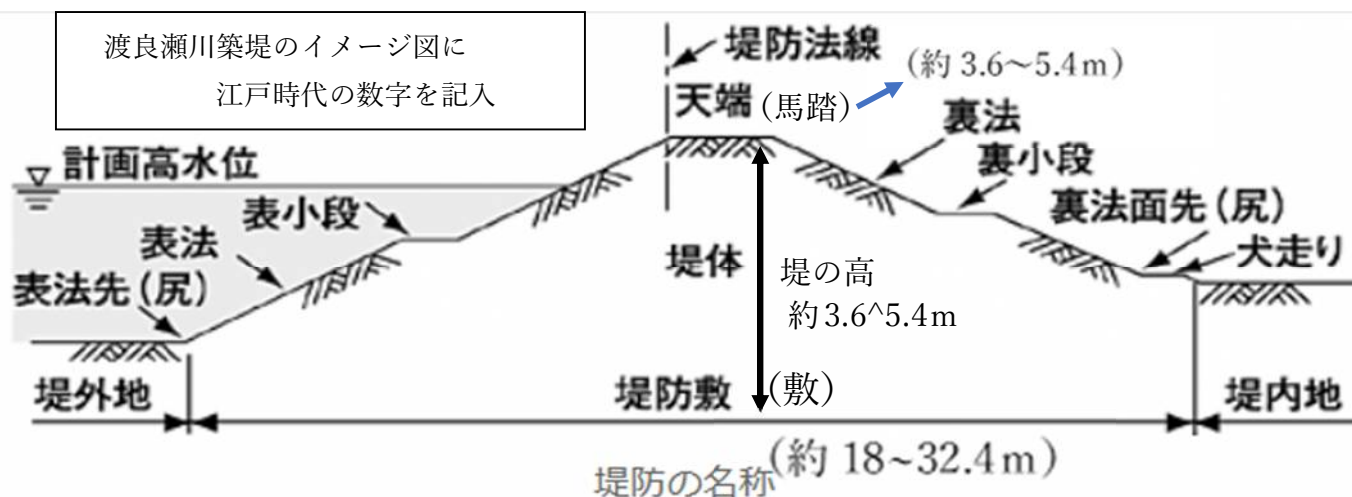
これにより低湿地帯が乾燥化し、新田開発が進み二代康勝の時代には次の村が建置された。【大荷場村】【細谷村】【離村】【内蔵新田】である』（参照：館林市誌の新田開発）

康政の築いた利根川と渡良瀬川の築堤の規模

| | | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|----------------------------|-----------------------------|
| 利根川の堤防は長さ 1 万 8 千 320 間 (約 32 km) | 左岸堤は高さ 1 丈 5 尺~2 丈 (約 4.5m~6m) | 幅は馬踏 3 間~5 間 (約 5.4~9m) | 敷 15 間 (約 27m) |
| 渡良瀬川の堤防は長さ 1 万 2 千 93 間 (約 22 km) | 右岸堤高さ 2 間~3 間 (約 3.6~5.4m) | 幅は馬踏 2 間 (約 3.6m) | 敷 10 間~18 間 (約 18~32.4m) |

大正時代の渡良瀬川築堤改修による【堤防の高さと馬踏の規模】を比較すると
 渡良瀬川の堤の高さ 2 間半~3 間 (4.5m~5.5m) 馬踏 2 間~3 間余 (3.6m~6m)
江戸時代の築堤と大正時代の築堤の規模は、やや大きくなった程度であった

(参照：足尾鉍毒事件と渡良瀬川東遷・松浦茂樹)



3) 榊原康政の行った大土木事業の成果

3-1 利根川と渡良瀬川の堤防造成により、毎年の様に起こっていた氾濫が治まり、館林を取り囲む低湿地帯や沼沢地の水が次第に減じて乾燥化してきた。

3-2 そのことにより、新田開発が可能となり三代忠次の時代には板倉を中心にして石高の増産が図られた。➡ 嘉永七年（1630）十二月に当時の城主である榊原忠次は新墾田一万石の加増を受け、11 万石を領有した。この新墾田一万石は、家臣清水藏之丞が内蔵新田（板

倉町)などを開発したことによる』

(参照：近世館林の歴史)

3-3 新道建設が可能となった。➡ 以前は城下町の西端を南北に走っていた旧小田原街道を、市街地中央付近に新たに造る計画をし、南側の湿地帯は小寺・青山両検断、北部台宿坂下の湿地帯は荒瀬・石川両名に命じて新道建設を行った。この工事は慶長二年（1597）に完成。道幅は市街地が6m~12.2m、その他は5.4mという当時としては驚異的な広さだった。

⇒【館林道・日光脇往還】

(参照：館林・邑楽の歴史と文化)

第2部 徳川綱吉の矢場川の付け替え工事

1) 徳川綱吉の矢場川の付け替え工事は、〔新田開発〕か

1-1 『矢場川の付け替えの目的はなんであったのか？

木戸村より下流地域の水害防止と渡良瀬低地の開発が指摘されているが、確定的な史料は見つかっていない。』

(参照：館林市誌 通史編2 近世館林の歴史)

1-2 新田開発により、2万石余りの加増が記録に有り。(館林藩領分にて) (詳細別紙資料3)

『綱吉の所領25万石は、寛文元年で上野国・下野国に合わせて12万9000石余、これに加え信濃国1万5000石余、美濃国7万石、近江国3万5000石余と『館林式拾五万石割留』に記載があり、綱吉藩主時代末期の作成と推定される『館林領地方諸用集』によれば上野国・下野国の所領高は15万石余と記載があり、寛文元年時代より2万石余増加している。これはまさに綱吉の行った矢場川の流路変更により、新田開発が大きな要因と思われる』

(参照：佐藤孝之『徳川綱吉藩主時代の館林藩』)

【渡良瀬低地での矢場川変流工事前と工事後の石高比較】

参照：館林市政60周年記念 徳川綱吉
館林教育委員会

寛文年間((1661~1673)と元禄元年(1688~1704)との比較

多くの村で石高増があったが、特筆すべきは伊谷田村の261% 海老瀬村の188%

次いで当郷村84%、大新田村78%であった。(伊谷田村は新しく4か村に分割された)

1-3 古文書から見る綱吉の矢場川付け替え工事記述 (参照：館林市誌)

『矢場川ノ儀ハ江川ヨリ足次前之候所寛文四甲辰年(1664)木戸村ヨリ上早川田雷電裏迄新川二堀回シ 然時ニ 木戸足次傍示塚上早川田迄先年野州梁田郡二是ヨリ下 離村迄安蘇郡二候所寛文五年(1655)巳年ヨリ新上州邑楽郡改』

と延享五年(1748)『日向村田方畑方反別石高覚』の末尾に記されている

1-4 指揮したのは当時の水奉行 (天和3年(1683)幕府に差し出した聞書による)

『綱吉時代当初の水方奉行には 寛文2年(1662)2月に斎藤八右衛門・大岡十(重)兵衛が任命され、堤川除(かわよけ・堤防)・用水堀・橋々の普請を行った。』とあり、また、普請に際し必要な品々は領主持ちで、人足は百姓が負担し、一日一人扶持米一升を下付とある。

1-5 当時の築堤は右岸側(館林側)にのみだった。

この時の築堤は、右岸(館林側)のみで日向や足利側には堤防を築かず。当時堤防を築くには、その土地の百姓が負担で、100戸足らずの農家が幾人もの旗本支配で更に細分化されたことで、とても人足を出す余裕はなかった。『土手が無ければ、大水の時オラが方へ肥料水が流れて来る』とあきらめていた(参照：館林懐古)

1-6 今も残る上早川田の【雷電神社】と地図上の堤防範囲



矢場川の儀八、江川より足次前江流候所寛文四甲辰年、木戸村ヨリ上早川田雷電裏迄新川に堀廻シ

地図上の線が綱吉築堤範囲、左側には築堤せず 地図上の点々は旧矢場川の流路を示す。
 まとめ

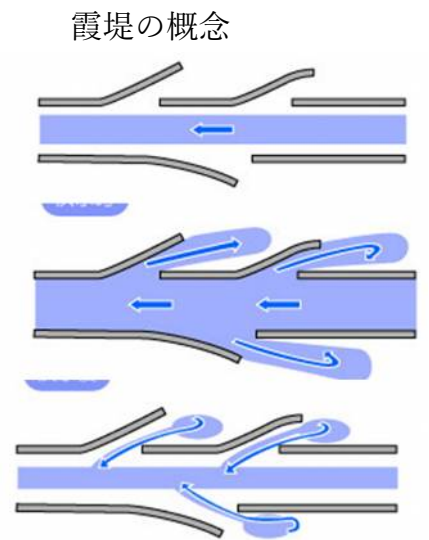
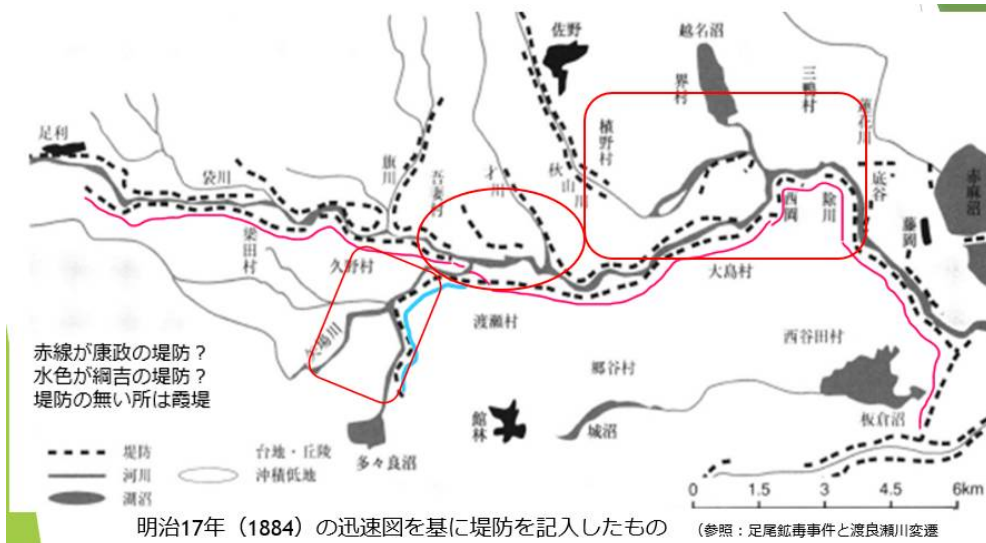
【徳川綱吉は榊原康政の治水対策を更に推し進め、完成させた??】(加賀美推論)

今まで見てきたように、戦国末期に渡良瀬川本流が矢場川から渡良瀬川へ移りつつあった頃、館林城主になった榊原康政が治水対策として渡良瀬川と利根川に堤防を築くことで、館林台地の廻りにある低地から水が引き始めていた。(1595年以降)

徳川綱吉は渡良瀬低地を流れる当時の矢場川の流れを止める(変える)ことで更に低地から水が引いて新田開発がしやすくなると考え、矢場川の流路変更を実施した。

寛文四年(1664)この流路変更により、木戸から板倉の離れ辺りまでが穀倉地帯へと生まれ変わっていきました。

付録【渡良瀬川と矢場川の築堤工事から見えて来るもの】 明治17年迅速図に見る堤防の様子 (参照:足尾鉍毒事件と渡良瀬川変遷)



上図に示した点線は、江戸時代の堤防を示す。四角や丸で囲んだ所を良く見ると左岸側は点線がない所がある。そこには大水の時、敢て氾濫させ水の勢いを弱める工夫をしている。
 矢場川付け替え工事した左岸側には全く堤防は見られない【権力の5在った館林領の水害対策】

2) 綱吉が築いた堤防のその後の様子

1-1 現在の多々良堤防に見る時代の変化



上図の1の部分にある堤防で時代の変化がみられる ⇒ 3つの時代の様子



下の写真は左写真の一番奥江川橋付近の堤防は道幅が狭く、砂利道でかなり古い時代のものと思われる



1-2 落合橋下流の矢場川右岸堤防に見る【新・旧】の様子。〔吉田松陰が見たのは旧堤防か〕



落合橋から下流右岸に見る新旧堤防の範囲【2】

航空写真に見る新(2)旧(1)堤防



新堤防

落合橋附近道路より

旧堤防



新堤防

新旧合流手前

旧堤防

第3部 堰番は戦後、子供達のプールだった

現在の木戸堰と以前の木戸堰遺構



現在の木戸堰

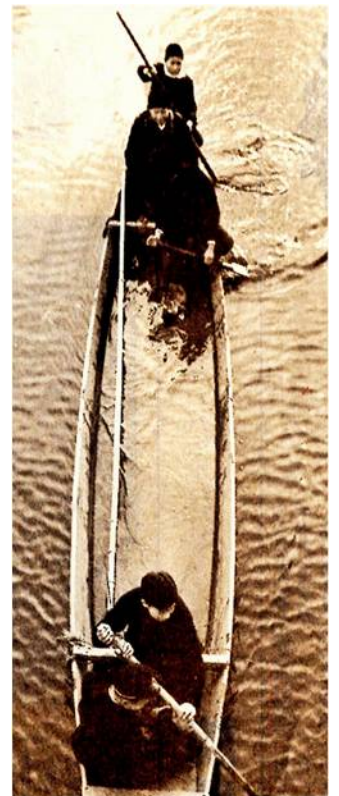
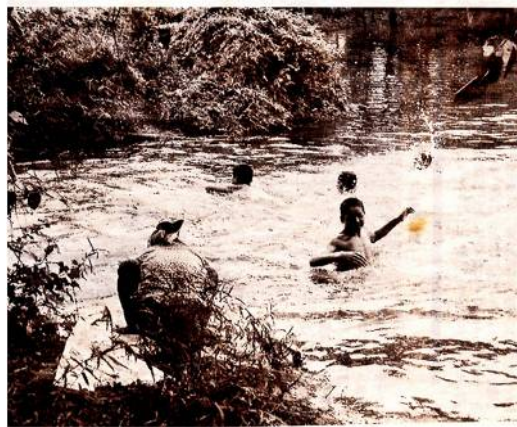
四ヶ村堰

伊谷田堰



秋冬にしか見られない旧木戸堰遺構

子供達が水遊びをした堰番



上写真は伊谷田用水に飛び込む子供達

写真は増田氏